

田村先生を送る

松本幸夫 (数学教室)

今から20数年前のある日、理学部1号館の小講義室で、幾何学の最初の授業の始まるのを待ちながらざわめいていた我々学部学生の前に、颯爽と入って来られた先生の姿は大変印象的であった。そして、何の前置きもなく、黒板の左上にアーベ

ル群の系列を書かれ、チェイン複体、ホモロジー群、その性質、等の議論をぐいぐいと展開されていった。その迫力に我々はただ圧倒される思いだった。時どき、左手の中指を頬に軽くあて、何かをちょっと考えられる風情であったが、それが

何とも格好良かった。当時としてはまだ珍しい皮の肘当てのついたブレザーを着ていらっしまったことも、なぜか記憶に残っている。

これが田村先生との出会いだった。先生はフランス、アメリカにおける数年間の研究生活を終え帰国されたばかりで、日本に新しい微分位相幾何学を育て上げようという意気に燃えていらっしまった頃だったと思う。もうふた昔も前のことであるが、先生の雰囲気はこのころから今に到るまで少しも変わっていない。先生の数学を研究される態度には、現在でも初々しい純粋さとロマンを感じてしまう。

先生の数多くの御研究の中でも、全ての奇数次元球面上に余次元1の葉層構造を構成された御仕事は、とりわけ忘れ難いものである。それは、理学部の助手にさせていただいて2年目の1971年のことだったと思う。奇数次元の球面上に余次元1葉層構造が存在するか？という問題は、当時最も関心を持たれていた問題であった。我々の仲間内でも、ああでもないこうでもない、寄るとさわると議論していたが、ある時、先生が晴々とした顔でやって来られ、“僕出来たよ、君達、何なら1週間くらい待ってやろうか”とおっしゃったのにはショックを受けた。進歩とはこういうことなのか、と目を開かれる思いがした。数学という重い歯車が、目の前で、確実に、きしみながら回転した、というイメージが頭をかすめたのを覚えている。

御自身の研究ばかりでなく、先生は研究体制の整備にも多大の努力を払われた。日本数学会理事長、東京大学評議員等の学内外の要職を務められ、また、日本学術会議、日本学術振興会、文部省学術審議会等々の委員にも選ばれるなど、先生の御活躍は枚挙にいとまがない。これらの場でも多くの御苦勞がおりだったろうと推察されるが、私ごととき若輩ものには知る由もない。

先生の人間的大きさを痛感するのは、このような学内外の御活躍と御自身の研究の両方を、少くとも傍目には、実に何なくこなされたことである。

実際、上に述べた葉層構造の存在問題の解決も、教室主任として最も多忙な時期になされたとうかがっている。

余裕のある生活態度とでも言うのだろうか。しかも、この余裕の大きさには、先生の多彩な趣味を見るとき、更に驚かされる。お若い頃、油絵に凝られ、展覧会には何度も入選されたそうであるし、囲碁、将棋の腕前も相当なものとうかがっている。残念ながら私の“棋力”は、測定不可能な程微弱であるので、先生の実力がどれ程のものか全然見当もつかない。

ゴルフは既に20年のキャリアをお持ちである。また車のウンチクも大変なもので、今でも新型の車種に関する諸情報に精通しておられる。

この春、田村先生は理学部を定年退官される。学生時代からずっと御指導いただいたものとして、いま先生を送る文章を書いているが、まるで全体が非現実的に思えて、実感が湧かない。まして先生は、現在、Seifert 予想という大きな問題に取り組んでおられ、毎日のように研究の進展に関してお話しをうかがっているような状況である。

我々学生の前に颯爽と姿を現わされた先生が、また颯爽と理学部を去って行かれる。

先生、どうぞいつまでもお元気で。